

九龍塘の恋

カオ
ルー
ン
トン

ポール・セロー

中野恵津子 訳

KOWLOON
TONG
PAUL THEROUX

カオ
ルーン
トン

九龍塘の恋

ポール・セロー
中野恵津子 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

KOWLOON TONG
BY PAUL THEROUX
COPYRIGHT © 1997 BY PAUL THEROUX
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH THE WYLIE AGENCY (UK) LTD., LONDON
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

カオル・ントン
九龍塘の恋

一九九七年七月一五日第一刷

著者 ポール・セロー

訳者 中野恵津子

発行者 新井信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話〓〇三―三二六五―一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示しております。

ISBN4―16―317050―2

「馬照跑
舞照跳」

「馬は走りつづける
ダンスはつづく」

鄧小平が広東語で香港に与えた言質

装帧
馬場
崎仁

九^{カオ}
龍^{ルン}
塘^{トン}
の
恋

ベティには、戦前住んでいたロンドン郊外と香港がたいして変わらないように思われる日があった。たとえば今日、窓辺にうっすらと霧のかかる寒い朝など、心はバラムに戻っていた。灰色の空が、引きちぎられたクッションの詰め物のように——といっても、あの変な匂いのする藁わらの詰まった中国のクッションではない——ふわふわした大きな塊となって迫ってきた。風が吹きつけると、まるで頭のすぐ上から降ってくるように、雨粒がいちだんと大きな音をたてて屋根を叩いた。屋根は、アルビオン・コテージの居間の天井でもある。空と屋根と天井——こんな日には、それらが一つになった。

ベティ・マラードはこの居間を「ラウンジ」と呼び、今はそのラウンジで、息子のバントが朝食をとりにくるのを待っていた。

「まったくねえ、こんなことがあるなんて」と彼女は雨の音に向かってそっと話しかけた。「チンキー・チョンクっていうのは、ほんとにもう」

ベティは考えつづけた。へ中国の親戚？　どういう中国の親戚よ？

今し方、モンティから電話があって、受話器を置いたばかりだった。モンティはミスター・チャックの事務を取り仕切る弁護士だが、ベティの弁護士でもあり、マラード家の弁護士でもあり、工場の弁護士でもある。みんな、モンティを信用していた。同じロンドンの出身で、山高帽をかぶったなかなかの洒落男だ。ベティが「私があんたを信用しているのはね、ユダヤだからよ」と言ったときも笑って受け流し、ぼんやりした目で彼女を見ただけだった。

へミスター・チャックは、中国に親戚がいるなんて、話したことなかったけどね

問題は、バントにどういうふうに話すかだ。

突然、また雨の叩きつける音が大きくなり、ベティはふたたびバラムに戻っていた。顔をあげると、マホガニーのサイドボードの上に、エリザベス女王の写真が見えた。同じ壁にかかっている亡夫ジョージの空軍の制服姿の写真より大きい女王の写真は、天井の照明器具やキャンドル・ブラケットと同じように、揺るぎない存在としてこの部屋の一部になっていたのだが、ベティは最近、女王の顔をまじまじと見て、ほんとうにそうだろうかと思問を抱くようになった。女王は神も同然の人だったけれど、それと同時に母親でもあり統治者でもあった。その王国は確固として安泰で、秩序だっていた。今までは、「女王は働き者だわ」と、祝福の祈りのように唱えるのがベティの口癖だった。

ベティはこの歳になるまで、英王室を揺るがした家庭騒動ほど大きな変化を見たことがなかった。それは父の死よりも強烈で、先の戦争よりもたちが悪く、しかもあの戦争と同じように予期

せぬ出来事と心痛に満ち満ちていた（「あきれたわねえ、よくもまあ！」と出るのは溜め息ばかりだった）。ベティの父は老いて病氣になり、来るときが来て亡くなったのだ。戦争は、いろいろあったが最終的には勝利した。しかし、ここ数年間の離婚のゴタゴタやら不倫やらの王室スキャンダルには、ほとほと幻滅してしまった。あやうく罰当たりな言葉が口について出そうなくらい嘆かわしく、大事なものを失った無力感と困惑で頭がおかしくなりそうだった。女王を除けば、ほかはみんなふつうのまじめな人間たちばかりで、世間に生身の姿をさらしていた。王室一家の生身の姿なんて、ベティはじめて目にした。ファージの牛みたいな顔の下品なそばかすや、ダイアナの棒切れのような腕や、チャールズの生白い脚まで見てしまった。女王の威光にも王室の変貌にも興味のない息子のバントに向かって、ベティは言った。「それに、あの末っ子ね、まったく恥知らずもいいとこだけど、あの子ホモよ、まちがいない」

枝を張り出した木々から雨が風に振り落とされて、家の前の玉石や、ジョージとウォンが敷いたでこぼこの舗道の上に、バラバラと大きな音をたてた。音を聞いて、そちらの方角をのぞきこむと、群生しているユリが見えた。葉は雨に打たれ、花はうなだれて、白いボンネットをかぶった少女たちがベティとともに悲嘆に暮れているようだった。

ベティは紫色の手編みのセーターを着ていた。目の前にあるずんぐりした形のティーポットのカバーと、二つの半熟玉子にかぶせたポンポン付きの帽子のようなエッグ・カバーも、同じ毛糸で編んだ。毎朝、ウォンはベティの手作りのアクセサリーをポットと玉子にかぶせた。紫が食卓に似合っているとはいえないが、なにしろ安かったのだ。工場と取引のある卸売業者から分けて

もらったからで、量が多いのもそのためだった。サイドボードの上には、紫の毛系のコースターを敷いた土産物のグラスが飾ってあった。ほかに、土産物の皿や状差し、がっしりした魔法瓶、スペインの陶器でできた小さなワイン樽の爪楊枝入れなど、さまざまな小間物（真鍮製の容器、クリスタルの熊、七宝焼きの灰皿）が並んでいたが、どれも、ベティがロンドンの空港ロビーのギフトショップで買ったものだ。

同じ紫の毛系で、椅子の腕木カバーや電気スタンドの飾りリボンを編み、写真（カシヨールトンで撮ったジョージとアイヴィ、サウスエンドで撮ったリーニーとケンと乳母車に乗ったバント、ランタウ島（大嶼山）の銀鑛灣^{シルヴァーマウンテンベイ}の浜辺で撮った二組の母子——ベティと幼いバント、チャチアとその息子ウォン）の額縁にも、紫の毛系の縁飾りがついていた。毛系は湿気を含んで、濡れた毛糸独特の匂いをそこらじゅうに振りまいていた。それに、冷たくなったトーストとベーコンの脂、そしてウォンが少し開けておいた台所のドアから漂ってくる切ったばかりのパパイアの甘酸っぱい香りまでが混じった。

アルピオン・コテージは、ピーク消防署を眼下に見おろす崖の上の、^{ルザード・コート}盧吉道にあった。今日は、消防団員は全員なかについて、窓もドアも閉まっていた。話し声も音楽も高笑いも聞こえない。今日のような日には、この平屋の家の何もかもが湿気の膜をかぶり、カビを勢いづかせ、死体安置所の腐敗臭のような匂いを発散させる。ワニスを塗った木も湿気を含み、重々しく時を刻むぜんまい式の（主ぜんまいがとても頼りない）置き時計の音もくぐもって聞こえ、オークの銀食器ケース（「ジョージとベティ、1946」と彫った銀の小皿も入っている）や、毎日くるくる回

して日付を出す機械カレンダーも、表面が濡れたように光って見えた。カレンダーはさつき回したばかりで、「THU 7 MAR 96」の文字がのぞいていた。それから、ソファやレース編みのクッション・カバーも、革張りのフットスツールも（まだジョージのかかとの跡がついたままだ）、ジャムの瓶や紅茶のお盆も、肘かけ椅子のわきに積まれた古雑誌も、肘かけ椅子そのものも、みんな変な匂いを放っていた。

それでも、よく晴れた朝には、東の窓に目を向けると、ブヨやアブラムシのたかっている窓辺の植木箱からキンレンカの花があふれ、その向こうに、まるで幻でもあらわれたように中国が——昔よく使っていた呼び方で言えば「レッド・チャイナ」が——見えた。深圳^{シェンチン}へは、ヴィクトリア港の向こうの九龍塘^{カウリントン}の工場から、電車で一時間で行ける。ペティはこの四十五年間、一度も中国へ行ったことはなかった。生前のジョージも、息子のバントも、行ったことはなかった。遠い近いの問題ではない。中国なんかに行ってどうするの？

バントが鼻をかみながら入ってきた。「六時に電話が鳴ってたの、聞こえた？ あんな早くからかけてくる馬鹿がいるとはね！」

バントのあとから、ウォンがトースト立てとベーコンの皿とさつき匂っていたパイヤと、筒形に巻いたナプキンを持って、足早に入ってきた。

バントはハンカチをたたんでポケットに入れ、テーブルの前へ行ってちよつと立ち止まった。四十三歳。頭が禿げかかっている。バントは点字をなぞるように指先で軽く頭をさわっていた。

まるで幸運を祈っているように……それとも髪を探しているのか……いや、もしかしたら、まだ髪があった頃の癖なのかもしれない。

「ウォンがオート・ケーキを作ってくれたのよ。オート・ケーキ、おあがんなさい、バント。バントにもオート・ケーキ、お願いね、ウォン、おいしいわ、これ」

ベティの褒め方はどこか得意気だった。このオート・ケーキはウォンのオリジナルではない。ベティが自分のレシピをウォンに仕込んだのだから、半分は彼女が作ったようなものだ。

ウォンは背が高かった。バントよりも高く、北方系中国人に特有の幅広の顔と平たい頭をして、目と目の間があき、その容貌は蛇を思わせた。ほほえむとと蛇に似てくるのだが、ほほえむことはめったになかった。それより声をあげて笑うことのほうが多く、そのほうが不気味だった。喜んで笑っているのではなく、不安や心配があらわれているからだ。今朝も、今にも笑いだしそうな顔をしていた。あの電話の話を、小耳にはさんだのだろうか？

ウォンは何も言わず、テーブルに朝食を並べて引きさがった。歩き方が斜めに傾いているのは、背が高すぎるせいだとベティは思っていた。ウォンは独り暮らし、何も謎めいたようなところはない。彼はジョギングをしていた。

バントも何も言わなかった。頬に黄身をくつつけて、玉子を口いっぱい頬張って食べていた。「ベーコンがちよっぴり残りそうだわ」とベティは言った。

「ほんとに残すんなら」。バントはスプーンを動かしながら言った。

「どうぞ、いいわよ、おあがんなさいな」

母親はカチカチになったベーコンを三切れ息子の皿に移すと、ラジオのスイッチをひねった。

黄色く光るダイヤルのついたラジオは、緑色のベークライトの、パンケースほどの大きさで、パチパチ雑音が入った。それはジョージが買ったラジオだった。「これ、安物よ」とベティは言ったが、バントはそのラジオが日本製でないことを今でも誇りにしていた。それはロバーツ社の製品だった。サイドボードの上に置かれた頑丈なジョン・ブル社の魔法瓶と同じく、それはイギリス製だった。「僕たちだって、昔はラジオを作ってたんだからな!」。テレビはブッシュ、蓄音機もブッシュ。トースターはデュアライト。浴室の陶器類、洗面台、浴槽、便器はすべて、トウィフォード・アダマンツ。「それに車もね」。マラード家の車は、ジョージが一九五八年に買った黒いローヴァーだ。ジョージがこうした品々を自慢にしていたのは、自分が生きているあいだは、修理こそ必要になれ、たぶん買い替える必要はあるまいという理由からだ。道具類にしろ自分の着ているしっかりした仕立ての服にしろ、「私を最後まで見届けてくれるよ」とジョージは言っていたものだ。

ロバーツのラジオから聞こえてくる音は、新しい言葉を覚えるはめになった老人の声みたいだった。今朝、しゃべっていたのは、「一九九七年までの準備段階では——」

香港返還——ベティたちは「チャイニーズ・テイクアウェイ」(中国のお持ち帰り)と呼んでいた——何度も繰り返される言葉だ。香港のニュースといえばそれしかない。あとは、それに関連したニュース、経済も土地の埋め立ても商業用不動産の売買も、石油価格も、新空港も、政治家たちの懸念の声も、すべて返還と結びつけられた。ずっと以前から毎日同じことの繰り返しだ

ったので、パントはもう何も意見を言わなかった。しかも二人で話しあって、ずっとここにとどまってどうなるか見ていようと決めていた。危険なことではない。イギリスのパスポートもある。それに、香港に住むほかのイギリス人ほど、身軽なわけでもなかった。工場の半分の所有しているのだから。あとの半分は中国人のミスター・ヘンリー・チャックが所有していた。

「今日はセーターがいるわよ」とベティは言った。もちろん彼女が編んだセーターだ。「それと、傘を忘れないで」

パントが「細切りパン、くれる、母さん？」と言うだろうと先回りして、ベティはパンにバターを塗っていた。いつものやり方で、両足を開いて立ち、手に持った大きなパンの端にバターを塗った。塗り終わると、パンにナイフを入れ、バターを塗った部分を薄く切った。でも切っている途中で、パントが指を振り、「いけない、いけない」という仕草をした。口のなかがいっぱいで、頬が紅茶でふくらんでいた。

息子が反論できないとわかって、ベティは言った。「おまえ、食べながらこっくりこっくりしてるじゃない。ちょっとお疲れのようね」

彼の口からほんとうのことが聞けるとは思わなかったけれど、どんな嘘をつくか興味があった。ベティはパントが紅茶を飲みこむのを見守った。何を食べたかは、ちゃんと頭に入っている。半熟の玉子一個、細いベーコン五切れ、オート・ケーキ、パイヤ半個、トースト二枚。うち一枚にはジャムを塗っていた。細切りパンはなし。

今日のパントは、嘘もつかず、言い訳もせず、ただにっこり笑って傘を傘入れから引っぱりだ

すと、もう行かなくちゃ、と言った。

「ゆうべは遅かったのね」。母親は息子の嘘を誘い出そうとした。

バントは微笑して言った。「クリケット・クラブに行ってたんだ。ミスター・チャックと一杯やりに」

これはまた最悪の嘘をついたものだ。でも、嘘の中身はどうでもいいのかもしれない。洗濯かごに息子のシャツを入れたとき、安物の香水の匂いがしたが、あれはいやらしい自堕落^{じだろく}な女の匂い。尋ねれば否定するに決まっている。それにしても、いったい誰なのだろう？　ここは香港だ、誰であつてもおかしくない。用心しなければ……。

バントは横なぐりの雨のなかに出てゆき、丸みを帯びた黒いローヴァーに乗りこんでエンジンをかけ、両手をこすって暖めると、ハンドブレーキを下ろした。それから顔をあげ、母が雨に打たれながら車に近づいてくるのを見て、ぽかんと口を開けた。ベティは雨に濡れたつやのない髪と顔を助手席の窓ガラスに押しつけた。

「ミスター・チャックはね、死んだのよ」

まるで、あとから思いついたような言い方になってしまったけれど、そんなはずはなかった。モンティが電話をかけてきた朝の六時から、ずっと気になっていたことなのだから。ただ、共同経営者の死を、息子に何と伝えてよいかわからなかったただけだ。

バントは迷信深いほうではないが、これから以後、ローヴァーの革張りの運転席で身をのりだしてハンドブレーキを下ろすたびに（あるいはグリップを握っただけでも）母のその言葉を思い

出すだろうという気がした。ハンドブレーキを小気味よくちょっと持ちあげてカチッと下ろす、その動作で常にミスター・チャックの死を連想するにちがいない。パントは死を、ブレーキはすすのと同じように考えた。似たようなものだ。

「ごめん」とパントは言った。「ほんとは、ミスター・チャックとクリケット・クラブで会ってたわけではないんだ」

ベティは、唇をすぼめて顔をしかめ、パチッと瞬きした——それは「気にするな」という意味だった。

彼女は言った。「どうも、ミスター・チャックは、まるっきり——」

母はまだ何かしゃべっていたが、パントはもう聞いていなかった。やるべきことが多すぎた。入念に練ってある九龍塘カウリーントンの工場ヘインペリアル・ステッチングでのスケジュールを、今日は急いで組みなおさなければならぬ。パントは、たとえ楽しいことでも、不意をつかれることが嫌いだ。今回は楽しいどころか最悪の不意打ちで、今や人生のすべてが不確かになった。

パントは不意打ちが嫌いで、予定を立てないと不安になる性分だった。しかも間に合わせに急場をしのぐことが苦手なイギリス人として、急を要する問題に直面すると不安になって間違いが多くなり、あせると啞然として口もきけなくなってしまう。でも、死は待ってくれない。パントは否応なく神経を集中せざるをえず、その日の終わりに、短い時間でいろんな用事を片づけた自分に驚いていた。